

自主と主権、社会発展

エミリオ・バルタサル

ご周知のようにアメリカの対朝鮮政策は長い歴史を持っています。

アメリカ帝国主義は朝鮮が自分と異なった思想と制度を持っていることを口実に朝鮮民主主義人民共和国が国際舞台に出現したそのときから共存の対象ではなく敵と規定しました。

朝鮮民主主義人民共和国との外交関係を設定するどころか、その国号を呼ぶことさえ拒否しました。

ひたすら朝鮮を窒息させ、占領する目的のみを追求しました。

これを達成するために反共和国敵視政策を執拗に実施しました。

さる世紀 1950 年代にこのアジア国と戦争をし、その後、数十年間核兵器を持って、またその範囲と強度、期間で類を見ない執拗な経済制裁で脅威しました。

ところが毎度、恥ずべき惨敗と苦しい失敗のみを続けました。ここに具体的な事実があります。

アメリカは 1950-1953 年に挑発した朝鮮戦争で自分の部隊を合わせて 15 の追従国家軍隊と南朝鮮傀儡軍、また旧日本軍の残余分子まであわせて 2 百余万の兵力と甚だしくて近代的な戦闘技術機材と戦争物資を動員させました。

しかし、太平洋戦争の 4 年間より 2.3 倍になる人的および物的損害を被り、降伏書である停戦協定に署名しなければならなかったが、これはアメリカの下り坂の端緒となりました。

また、アメリカ帝国主義の武装情報収集艦プエブロ号事件、アメリカ帝国主義大型スパイ機 EC121 事件、板門店事件のような 20 世紀の 60 年代、70 年代の挑発はアメリカ帝国主義の惨敗と不名誉で終わりました。

1990 年代から 21 世紀まで続けられてきた朝鮮民主主義人民共和国とアメリカとの核対決は結論的に言えば、朝鮮民主主義人民共和国に対するアメリカの敵視政策に死を宣言したと言うべきでしょう。

核兵器を持って常に北朝鮮を脅威しながら南朝鮮を核前哨基地にしたアメリカ帝国主義に立ち向かって朝鮮民主主義人民共和国は核兵器を保有したことによってアメリカが自分の核兵器で脅威していた時代に終止符を打ちました。

アメリカが執着する対朝鮮敵視政策がどれほどしつこいかは朝鮮の平和的目的の宇宙開発権利まで奪おうとあらゆる手段と方法を動員させたことから分かります。

このアジア国家がいかなる国もできる人工衛星を発射した時、アメリカ帝国主義はそれを重大視しながら朝鮮に対する制裁を強化するための国連安保理の「決定」を採択しました。

しかし、朝鮮民主主義人民共和国はアメリカの続けられる軍事的脅威と経済制裁の中でも人工衛星の製作および発射国、核兵器保有国の地位を強固にしており、強国建設で国際社会の関心を集める大きな成果を収めています。

現実にはアメリカの朝鮮民主主義人民共和国に対する敵視政策が完全な破産に直面したことを実証しました。

アメリカ帝国主義はこの明白な現実を認めて朝鮮民主主義人民共和国に対する敵視政策を変えなければなりません。

そうでなければ、必ず滅亡するでしょう。

私はアメリカのジョージタウン総合大学のある博士の確言を引用します。

「現世界で北朝鮮はアメリカに断然と挑戦できる軍事的実体であり、アメリカが主導する新世界の国際秩序に直接破裂口が開けるもっとも危険な存在です。」

今日の朝鮮民主主義人民共和国はアメリカの核兵器に小銃で立ち向かっていた以前の国ではありません。

経済建設と核兵器建設を並進させる路線を提示し、この地球上のどこにあっても核兵器と先見の明で攻撃者と彼らの本拠地を打撃できる能力まで備えました。

今日、朝鮮民主主義人民共和国はアメリカが望むどんな形態の戦争にも応じることのできる軍事的潜在力を持っています。

アメリカ帝国主義は自分の対朝鮮敵視政策が利益より損害を多くもたらすことを認識すべきです。

アメリカの本土とハワイ、グアム島、また太平洋作戦地帯の他の軍事基地は朝鮮の核の射程圏の中にあります。アメリカの支配層は朝鮮半島で戦争が起こる場合、彼ら自身が核被害を被ることを絶対に忘れてはなりません。

アメリカ帝国主義が自分の安定を保証するためには朝鮮民主主義人民共和国に対する敵視政策をできるだけ早く変えるしかありません。

アメリカは決定的に自分の政策を変えるべきです。